

仏教者は新型動力炉命名にどう関与したか？

—「もんじゅ」「ふげん」命名伝説の虚実—

工藤 英勝

1. 曹洞宗の常識は世間の

『曹洞宗報』「一荃草」に「『もんじゅ』と『ふげん』」と題する巻頭言が掲載されている。

一九七八年福井県敦賀に原子炉「ふげん」が、一九九一年には「もんじゅ」が設置されたが、設置者の依頼により、これを命名したのは、当時、曹洞宗の要路にあった師である。

いうまでもなく、普賢・文殊両菩薩の名を借りたものである。このニュースが新聞紙上にも掲載され、筆者もこの快挙にいささかの誇りを感じたものである¹。…（後略）…

曹洞宗の要職者・大本山の貫首（住職）が、高速増殖原型炉「もんじゅ」と新型転換原型炉「ふげん」の命名に何らかのかたちに関わったということは、なかば曹洞宗の僧侶間では「常識」化した伝説となっていた。その命名に関わった人物の名前には、命名時期により諸説はあり、その評価は是非分かれるものの、いまさら疑う余地のない事柄として定着していた観がある。

この曹洞宗の「常識」にはたして信憑性があるのか？ 2011年11月に永平寺町で開催されたある行事を契機に、この命名伝説をマスコミが追いかけたが、一向にこの命名伝説を裏づける記事や情報はおろか、その痕跡すらも出てこないという奇怪な事態に遭遇している。

「ふげん」が稼動する直前の1978年元日の朝日新聞には、「今春には原子の火 自前の新顔『ふげん』」と題する賛美記事がある。その解説には「ふげん」の命名について触れ、次のような清成迪氏のコメントを載せている。

「ふげん」の名前は普賢菩薩（ふげんぼさつ）にちなんだものだ。この菩薩は、象という巨獣を知恵と慈悲で自由に操っている姿として描かれている。「原子力という巨大なエネルギーを人類の知恵で完全にコントロールしようという願いをこめたのです」と、名付け親の清成迪・前動燃理事長はいう²。

1 『曹洞宗報』 第913号 2頁 2011年10月1日 松本健雄

2 朝日新聞 1978年1月1日 13面

佛教タイムスは検証記事「もんじゅ・ふげん 命名に僧侶は関わったのか？」を掲載し、1970年6月6日付自紙のトップ記事「原子力と仏教『文殊』『普賢』と命名」にある命名者・清成迪氏自身の寄稿文を紹介している。その結果次のような見解を述べている。

(永平寺町でのシンポジウムで明らかにされた) 命名に禅師が関係したようなやりとりだが、もんじゅとふげんの命名に僧侶が直接関係したような形跡はない…〈中略〉…文脈からみても〈清成迪〉氏が信念をもって命名したもので、僧侶から聞いた雰囲気はない³。

もし、命名伝説にあるような、清成氏の命名発案に対して、永平寺の禅師が「それはいいことだ」との返答をしたというような接触があったとすれば、命名当時、動力炉・核燃料開発事業団の副理事長であった清成迪氏自身の「もんじゅ」「ふげん」命名のコメントに曹洞宗・大本山の要職者のことが一切触れられていないのはいかにも不自然である。当時の一般的な世論からすれば、お互いにことさらに秘匿すべき事柄ではなかったはずである。

さらに不思議なことには、当の永平寺がすでに貫首命名伝説を撤回している事実である。永平寺の機関誌『傘松』を見てみよう。

編集後記中「文殊・普賢」の命名を七十六世〈秦〉慧玉禅師と記したのは記憶違いでした。お詫びをして訂正させていただきます⁴。

このような訂正記事を掲載している。訂正の対象になった記事はこうである。

◇もう十五年以上も前の事になるが七十六世秦慧玉禅師が名前を依頼されて「文殊・普賢」と命名したと言うことを僧堂の提唱等で伺ったものであった⁵。

編集者が「記憶違い」として訂正・謝罪しているのは、この文脈からすれば、別人の命名者を秦禅師として取り違えたというよりも、「文殊」「普賢」という動力炉命名関与自体であると推測される。

3 佛教タイムス 第2466号 1面 2011年11月17日

4 『傘松』 第630号 94頁 1996年3月10日

5 『傘松』 第628号 138頁 1996年1月10日

2. 立証の困難

筆者は端的に、秦慧玉禪師は新型動力炉の命名行為には直接にしろ間接にしろまったく無関係で、当時、動燃副理事長の清成迪氏とも面識はないとの仮説を立てている。しかし、この仮説の立証にはふたつの困難がある。

① 伝聞情報は直接、間接を問わず根拠とはならないこと

筆者は秦師から新型動力炉の名称について直接話を聞いたこともなく、それを聞いた人物からの間接的な伝聞情報に接しているわけでもない。

秦師から直接、「もんじゅ」「ふげん」の命名に関する話を聞いた永平寺機関誌の編集者自身が、「編集後記中『文殊・普賢』の命名を七十六世〈秦〉慧玉禪師と記したのは記憶違いでした」としているのだから、伝聞情報は当てにならない。

② ある事実・現象がまったく存在しないことの証明は、「悪魔の証明」とされ、論理上の詭弁となる危険がある

前述のマスコミの検証記事や、これまでの命名に関する公開情報によって、僧侶の関与の痕跡が見当たらないといっても、そのことが命名への関与がなかったことを証明するものとはなりえない。実際にはあったが、諸事情から公表はされなかった蓋然性・可能性はなお残るからである。

これらふたつの困難を乗り越えて、「秦慧玉禪師が新型動力炉の命名行為にはまったく無関係」であることを証明するには、秦師が「もんじゅ」「ふげん」の名称にどのような評価をしているのかを、伝聞ではなく、自身の手記なり何らかの記録を発見し、このことから命名伝説は論理的にも事実上も成り立たないことを証明しなければならない。秦師はすでに故人であり、直接の肉声の証言を得ることはできない。

しかし、そのような離れ業が可能なのだろうか。

3. 疑問の氷解

ある記録が存在する。それも秦慧玉禪師自身の文章だ。筆者は未見であるが、もしかしたら自筆原稿も存在するかもしれない。その全文を以下に引用する。

昨年正月のことになりますが私の友達、市原豊太氏より揮毫の依頼を受け、そこに希望で「侍多千億佛」と一行を書きました。

市原氏はこれを表装して床に掛けておられたそうですが、ある時、お友達がその軸をみて是非、譲って下さいというのでお渡ししたそ

うです。

そこで又、代りに一軸をお願いに来られましたが、その時に、お友達についてお伺いしました。

その方はいま、福井県敦賀市に建設されることになっている原子力発電所に「もんじゅ」の名称を命名された方だそうです。

侍多千億佛とは観音経の偈、最初の言葉ですが、この方が新型動力炉の名称を「文殊」と「普賢」と命名されたとお聞きして感激しました。

いうまでもなく文殊と普賢はお釈迦様の脇侍として奉祀される両菩薩様です。これこそ科学万能の中に在って、尚且つ宗教の、仏教の教えを仰ぎ科学との調和を念願されているということによるものでしょう。

お釈迦様の脇侍、文殊様は獅子に乗って智慧を象徴し、普賢様は象に乗って慈悲を象徴していますが、この命名は智慧と慈悲によって原子力をコントロールし、その上で人類の幸福を築こうとしているとみられます。

敦賀市白木に建設されることになった高速増殖炉原型炉「もんじゅ」は、その様な尊い念願の下に命名されたというのです。永平寺も福井県に在りますが、些か文殊・普賢とお名前をお聞きするだけでも仏教と因縁の深い処であるといえます。

これを御命名された方は「侍多千億佛」（千億も多くの仏に侍す）という誓願で科学との調和を理念とされたことは勿論、次にある文句、「発大清浄願」（大清浄の願いを発す）という大乘菩薩道の誓願もお持ちであったことが伺われます。

たまたま、私の一軸が原子炉の文殊・普賢の御名を撰ばれた方によって大切に御護持されているということに、深く感得致した次第です⁶。

直接、間接の伝聞とそれに由来するさまざまな伝説がどうであろうと、秦慧玉師自身の手記以上にたしかな真相は存在しない。

この記録から直接読み取れる事柄は、

①新型動力炉「もんじゅ」「ふげん」の命名行為には、秦師は助言を含

6 「文殊と普賢」1982年

めまったく関与していない

- ②この文章の執筆時点で、秦師は「もんじゅ」「ふげん」の命名者とは面識はない
- ③秦師に「もんじゅ」「ふげん」の命名についての話題を提供したのは、命名者ではなく、その友人の市原豊太氏である。市原氏は同時に秦師の友人でもある
- ④命名者には市原豊太氏を通して、秦師の揮毫が渡っている
- ⑤「もんじゅ」「ふげん」の命名に秦師は関与していないが、命名後にこの命名の由来を聞いて、それを賛嘆している。新型原子炉政策全般についての賛意とまでは受け取られないが、少なくとも肯定的な受けとめ方をしている

ちなみに、市原豊太氏は著名なフランス文学者で、独協大学名誉教授、東京大学教授等を歴任し、1990年8月14日に死去。秦師とは旧制浦和高等学校の教員時代の同僚である。

奇怪な命名伝説の謎はこれでほぼ氷解した。

4. 命名への直接の関与はなかったが

巷間に蔓延してきた秦慧玉禅師・永平寺貫首による新型動力炉「もんじゅ」「ふげん」命名伝説の実態・正体は、秦師の友人との会話における「もんじゅ」「ふげん」名称への「感激」という反応にあった。

直接にも、間接的にも命名行為じたいに、秦師は関与していないし、原子力政策推進に積極的に関わってはいない。

しかしながら、上述のような肯定的な感想を述べ、事実と異なるかたちであっても、永平寺の要職者が命名に賛同しているという噂が蔓延してきたということは、ある意味では、「もんじゅ」「ふげん」に代表される国産技術の新型動力炉にもとづく原子力政策を翼賛する社会的効果をもってきたといわざるを得ない。

「もんじゅ」が1995年12月8日にナトリウム漏洩等の重大事故や故障を起こさず、その後も順調に運用・発電できたならば、このことはむしろ「美談」として語られていたかもしれない。

5. 新型動力炉の命名経緯とその由来

さて、国産技術による新型動力炉の命名には、動力炉・核燃料開発事業団〈動燃〉の副理事長（当時）であった清成迪氏が主導的な役割で関わっていたことは、すでに述べていたとおりである。ただし、これは清成氏一個人の発案によるものではなく、当該事業団および日本政府機関が機関決定している。『動燃二十年史⁷』『動燃三十年史⁸』には、1970（昭和45）年4月8日に茨城県大洗町に建設中の大洗工学センター開所を機会に、高速実験炉を「常陽」、FBR原型炉を「もんじゅ」、ATR原型炉を「ふげん」と命名している。

『動燃史』の巻頭グラビアには、文殊、普賢両菩薩像を掲げ「巨大な力を智慧と慈悲で制御」という表題で、「もんじゅ」「ふげん」の由来を次のように述べている。

文殊、普賢の両菩薩は、智慧と慈悲を象徴する菩薩で、獅子と象に乗っている。それは巨獣の強大な力を智慧と慈悲で完全に制御している姿である。原子力の巨大なパワーもこのように制御され、人類の平和と幸福に役立つのでなければならない。動燃が開発する明日を担う発電炉—高速増殖炉と新型転換炉の原型炉にそれぞれ「もんじゅ」「ふげん」と命名したのはこのような悲願によるものである⁹。

国家プロジェクトによる新型動力炉建設事業の正史に、政教分離原則が疑われかねない仏教菩薩尊像が堂々と掲載されているのは、異例中の異例である。それを実現にこぎつけたのは、発案者の清成迪氏の並々ならぬ熱意があったからであろう。

清成氏の命名については、当時の動燃同僚でもあった諸岡佼（さとし）氏の証言がある。

昭和四五年四月八日、大洗工学センターの正式開所に当たって、動燃は高速実験炉を「常陽」、高速増殖原型炉を「もんじゅ」、新型転換原型炉を「ふげん」と命名。

これらの命名には、職員からの募集が行われたが、清成副理事長は教学と仏教の思想と原子力平和利用の悲願から、自らの強い信念で、これらの名称を決定する¹⁰。

7 『動燃二十年史』 623～624頁 年表 1988年10月発行

8 『動燃三十年史』 26頁 1998年7月発行

9 『動燃二十年史』 グラビア 1988年10月発行

10 『創造への旅』 280頁 2001年1月発行 諸岡さとし

6. 仏教学会関係者が命名に助言か

清成迪氏が動燃の副理事長在職期に、新型動力炉三基にそれぞれ「常陽」「もんじゅ」「ふげん」という名称を提案したことはすでに述べてきた。ところで、ここで素朴な疑問に遭遇する。

清成氏がいかに仏教に造詣が深くても、前節に引用したような両菩薩の説明は、動力炉命名使用の是非はひとまず措くとしても、素人が考えたような文章ではない。かなり専門的な知識と信念がなくては公にはできない性質のものである。

命名の提案と決定に清成氏が主導的に関わったことは疑いようのない事実であるが、専門家からの助言はまったくなかったのであろうか？

ここで、独立行政法人日本原子力研究機構敦賀本部（動燃の後継事業体）の広報担当者から提供を受けた記事を紹介しよう。キーマンは関根瑛應氏（日本仏教徒懇話会）である。

関根氏は浄土真宗寺院の出身で、動燃の広報室長として原子力の平和利用のPR活動に携わっていた人物であり、清成氏による命名の経緯も熟知している。彼は命名発表前の1969（昭和44）年7月に、宗派本山の「安居¹¹」（会場は宗門関係大学）に招かれて、原子力事業の特別講座を担当している¹²。関根氏は次のように回顧している。

…安居というのは、僧が一定期間1ヵ所に籠って修行することで、諸宗派で行われていることであるが、宗門の最重要講座の安居でなぜ原子力の話か。それは当時、本山の最高顧問であった宮本正尊博士からの要請で、仏教者も最新の科学技術についての智見を持つ必要があるとの趣旨によるものであった。…〈中略〉…宮本博士には、その後、新型動力炉の命名に関して種々ご高見を賜ったが、博士から、文殊、普賢と並んで「法蔵」の名が持ち出されたことがあった。…〈中略〉…この提案はしかし、サイトの地名を重んずる「常陽」へと移行した。仏教界の碩学宮本博士の原子力に寄せられた思いやりを有難く思い起こしている¹³。

11 当該教団における教学講習会。京都で毎年開催される。同派の「安居条例」（条例第175号）には、この安居について「安居は、宗門が行なう学事の根本道場であって、本派の教師が広く仏教教理を攻究することを目的とする」と規定している。安居では真宗教義を講じる本講とひろく仏教教理を講じる次講に分かれるが、1969年7月1日付改正条例で科外講座（特別講座）を新設し、安居期間中に学識者から時代と社会についての講義が実施されている

12 演題は「原子力時代と人間生活」 『真宗』 第786号 2頁 1969年7月

13 「仏教界の怒りを越えて — 『もんじゅ』への期待」 『原子力eye』 2005年5月号 25頁

さらに関根氏は新型動力炉命名に助言した学識者に具体的に触れ、

この命名にあたって、当時の副理事長、清成迪氏が、仏教学界の長老、宮本正尊師や国文学の泰斗、土岐善麿先生と真剣な討議を交わされ、賛同を得られた経緯を、わたしはつぶさに承知しております¹⁴。という証言をしている。実験炉「常陽」の名称は当初、阿弥陀如来の菩薩名「法蔵」が考えられていたとは驚きである。宮本正尊氏は日本印度學仏教學会の初代理事長で、国文学者の土岐善麿氏も浄土真宗寺院出身者と伝えられる。

この関根証言¹⁵によれば、学界の重鎮が新型動力炉「もんじゅ」「ふげん」の命名にかかわり、何らかの助言や賛意を示したことになる。

7. 仏教者の命名関与・容認の歴史的責任において

筆者は所属教団の中で喧伝されていた大本山貫首命名伝説への疑問から発して、貫首は命名自体には直接は関与していないことと、実際の命名にあたっての助言者はまったく別人物であったことを知るに至った。

大本山貫首命名説には、ふたつの過誤があると考えられる。ひとつは当事者が手記に明記している事実関係が極度に歪められてまちがった「美談」にされていること。もうひとつは、新型動力炉の命名への助言・提案に関わった真の「功労者」を詐称していることである。

その上で、新型動力炉命名に関しては、命名の前後はありながらも、当時の本山僧侶だけではなく仏教学界も含め好意的な評価を示していたことはほぼ確認できた。仏教界の大勢としては、日本政府と企業体がナショナルプロジェクトとして推進してきた原子力政策をほぼ容認してきたことは動かすことのできない事実である。

仏教者が命名以前に助言をしたり、命名後にその由来を聞いて感激したりしてきたことや、今日このことを仏教の教えにもとづいて否定的に評価することの前提となる「仏教」とはいったい何かが厳しく問われなければならないことはいうまでもない。

たとえ善意にもとづくにせよ、命名に関与した歴史的な責任は仏教者の共業として担わなくてはなるまい。

14 「『もんじゅ』命名の趣旨に理解を」 サンケイ新聞 1996年5月21日 5面

15 関根証言を裏付ける記録は、命名当事者である清成氏や助言者の宮本氏からは発見されていないが、宮本氏が「昭和44年度安居」の本講者を担当し、科外講座が条例改正で新設され、同派機関誌に演題も記録されていることから、関根証言と符合する